

会員報告 第1班 平成23年3月18日（金）～3月24日（木）

○会社名 株式会社加藤建設（報告会発表文から）

参加した方（4人： 甲斐^{かい}寿^{としみつ}充 他の皆さん）

冒頭に、協定のこと、中部地方整備局からの要請のことは、大体説明されたものですから、実際に現地に行ったときの報告として手短に説明させていただきます。

私が会社から指示を受けたのは17日でした。17日の夕方、7時過ぎだったと思いますが、「明日から仙台に行ってくれないか」と言われて、それまでテレビで見て、被災者の方には失礼ですが、大変なことになっているなど第三者的な感覚でいたのですけれども、実際に会社から業務命令として明日から行ってくれと言われ、最初は冗談かと思ったんですけれど、私もサラリーマンですから快く引き受けました。

今説明したように急な話だったものですから、必要な機材・器具は我々建設業として培った技術を基に会社の方もいろいろ考えてもらって、胴長が必要じゃないか、眼鏡が必要じゃないかと、その辺は万全の準備をということで、甲斐君本人はとりあえず自分の身支度のものだけを用意して、明日昼にまた来てくれ、ということでした。

荷物ですけれど、ガスも水道も止まっていると聞いていますし、着替えも1週間といっても汚れたら1日2回着替えたいこともあるでしょうし、荷物がどんどん膨らんで、すごい荷物だと思いました。初めは車中で寝泊りするかもしれないと聞いていたものですから、あまり荷物があると横にもなれないと思って、なるべく少なくしようと思うのですが、いざ積みだすと相当な量になってしましまして、はっきり言って高速道路に乗るときにはカンカンでもあったら積載オーバーかというくらい、水から何からいろいろなものを積み込みました。食事の対応もしようということでプロパンガスも積み込み、本当にいろいろなものを持っていきました。結果的には、弊社の東北の営業所の方で何とか使えるビジネスホテルを探してもらえてものですから、持っていったプロパンや着替えもたくさんは必要なかったのですけれども、何せ急な要請だったものですから、取るものも取らずという状態で慌てて行かせてもらいました。

18日に出発しまして、19日の早朝、仙台の国道維持出張所に着きまして、仮眠を取って、朝、役所の方の指示を受けて被災地に向かいました。被災地に近づくと、テレビで見ていたよりも、実際に目の前に車が横転していたり船があったりとかいろいろで、やっぱり花火を近くで見たような衝撃的な感じで、直に目で見ると本当にすごいと感じました。

行く道中ですが、冒頭にも言われたように原発のことも心配だったものですから新潟から山形を経て東北に走っていったものですから、途中3月半ばということで雪も降っていましたし、国道の峠道では電光掲示板を見るとマイナス7℃とかになっていまして、寝袋と毛布だけで大丈夫かという心配もあったんですけれども。

そんな状態で心配は多々あったのですけれど、現地に到着しました。我々は第1班となっているのですが、すでに排水ポンプ車とか照明車が出向いていまして、すでに活動を行っていました。ですから、私たちは第1班と言いつつも、前任の業者さんの活動を引き継いだ状態です。

私たちが行ったのは東松島市という所です。皆さんもテレビで見ている仙台空港とかそういった所よりヘドロなどはないのですが、一面が湖のような状態で、ここが本当に道路なのか田んぼなのか畑なのか、見た感じでは最初は本当に思いもつきませんでした。

その中で、さらによく観察してみると、水の中に淡水魚のコイとかナマズとかが死んでいるのですよ。普通に考えると、泳ぎが得意な魚が溺れ死ぬというのはおかしいのですが、津波で海水が入ってきたということが、そんなところからも見受けられました。

私たちは24時間で排水作業を行ないました。管理としては、水位の変化もそうなのですが、排水ポンプ車の燃料、そしてポンプのゴミ。ポンプをかける場所が水の集まる所なものですから、ゴミとか浮遊物が結構集まってきましたし、また河口に近いということで工場も多かったのです。それで肥料とか薬の缶のようないろいろな物が浮遊しているものですから、そういったものがちょっと目を離すとすぐポンプの周りに集まってくるものですから、我々はそれらを取り除いて、24時間フルに排水の支援活動ができるようにということで、雪の降る中、3月半ばですけど結構雪の降った日もありましたので、そんな中、支援活動としてやれるだけ頑張ってきました。

我々は中部地方整備局からの要請で行ったのですが、ほかにも近畿地方整備局とかいろいろな方が支援活動に来てみえて、たまたま私たちの所はヘドロやそういったことはなかったんですけれども、隣でやっている方なんかは膝上までヘドロの積もった中で、足場の悪い中で、ポンプを盛替えたりとか大変な苦労をされている。行くとやっぱり、テレビで見るのとは全然違うという感じがしました。

あと、高速で移動と先ほど言われましたが、私も行って思ったのは、まず燃料不足ということです。下の道はガソリンスタンドの前に何百台という車が待ってしまっていて、狭い道路ですと相互通行ができないものですから通行止めみたいになってしまっていて、下の道では車の移動はできない状態でした。私たちも時間のあるときに下の道でほかの所も様子を見にいきたいと思ったのですが、下の道だと走れなくなるものですから、結局高速道路だけということで、先ほど野田企画部長さんが言われたように高速道路の重要性を感じました。高速道路がなければ移動もできないし、自衛隊の支援活動も、民間の支援活動もそうですけど、移動も何もできないと本当に感じました。

それと、私たちが行ったのは18日からということで震災直後といえば直後です。店がコンビニにしろ、食品店にしろ、みんな封鎖されたりとかで、店が閉じていて、たまたま高速道路で移動中にコンビニみたいな所がやっけていて、そこへ入ったときにおじいさんと小さなお子さんが来たんですけど、入ってきた瞬間に「お菓子も何もないね」と言って寂しく帰られたところを見て、同じ日本でありながら私たちは全然そういったことを受けてないんですけど、ちょっと離れたこういう所で本当に深刻な問題になっているのだということを感じました。

そんな中で、いざというときの準備は重要だと思いました。私もこんなことを言っても、自分の家では水もおろそかにして大してストックもしてないんですけども、こういったことを目の前で見ますと、水やある程度の食料品をもし皆様の家庭でストック

ができるのであれば、いざというときにはすごく助かると思います。後でいろいろ聞いた話だと携帯電話もつながるようにはなっていたのですが、皆さんが電話をかけられるということで混線してなかなかつながらないものですから、携帯でもメールのアドレスを利用した方がまだつながりやすいということですが、私も子供のメールアドレスは入れてないものですから、そういったものを入れることも必要かなと感じました。

最後になりますけど、今回、こういった協定の下に私たち、支援活動に行かせてもらったのですが、今後は仙台の方でも今度は復興の活動があると思うのですが、そんな機会にまた声をかけていただければ、積極的に行きたいと思います。ちょっとは社交辞令も入っていますけれども。

言えることは、本当に大変な状態でした。2週間ほど前ですか、テレビで陸前高田市の市長さんが言っていたのですが、向こうの方は避難所に入っているけど夏の暑い日照りの中でエアコンもなく、今でも被災者の方は被災者だと。確かにそのとおりだと思います。ですから、今後とも皆様もこういった機会があれば、同じ人間として、同じ国民として、特に我々建設業として真っ先に先陣を切ることができることもいっぱいありましたし、これからの復興活動でも我々が役に立つことはずいぶんできると思いますので、一緒になって頑張っていきたいと思います。

簡単ですけど、ご清聴ありがとうございます。

○会社名 海部建設㈱

参加した方（2人：かじうらとしゆき 梶浦俊幸 いちのへちひろ 一戸智尋 の皆さん）

東日本大震災の発生により、緊急災害対策支援活動派遣隊として、3月18日から24日まで宮城県大崎市で活動してきました。

北上川下流河川事務所大崎出張所に配属され、江合川堤防道路緊急復旧工事の現場で活動しました。

工事は今月中に堤防道路を完了する為に24時間（Ⅱ交代制）で行われていました。

私たちの作業内容は夜間作業時、照明車でナイター照明を行い、作業が円滑に出来るようサポートする仕事をしていました。

大崎出張所の所在地である大崎市の被害状況は、内陸部にあるので津波での被害は無く、地震だけの影響で道路は地割れや亀裂、液状化より段差が発生していました。構造物は古い木造の建物や電柱が傾いた状態のものが多数目に入りました。

日常生活では、電気、水道、ガスは復旧され、生活には不便はなかったが、店舗は店内が損傷していると商品不足の為、営業時間の短縮をしている所もあったが、ほとんどが休業状態でありました。

毎日見る光景は、消防署の給水車がサイレンを鳴らして石巻方面へ走行すると住民が燃料を求め、買えるか買えないか分からなくてもスタンドへ並ぶ車両の列です。

また、余震も1日に何回も発生するので、身体がマヒしてしまい、揺れているのからなくなる状態になってしまいました。

私達は1班の出動で、支援活動の要請を受けたのは出発の前日であり、現地情報がわ

からないまま、とにかく食料・燃料・衣類等を準備するのが精一杯で、現地に向いました。せめて2日位の準備期間があれば、少しは精神的不安も解消できたと思います。

作業に於いては、3月下旬でも雪が降り、夜間作業の為、照明車の発電機の扉が凍結して開かなかったことや東北の寒さは、肌に突き刺さるように感じる寒さで、非常に困りました。

また、緊急車両でも燃料の補給が制限され調達が困難な為、必要最低限の使用に心掛けました。

今回、支援活動により、自然の脅威に触れ人間の無力を実感しました。当地域に於いても東南海・東海・南海大地震等の大災害の発生が懸念される今、少しでも今回の支援活動を通じて得た教訓を基に、日々の備えを大切にしていきたいと思います。

○中日建設株式会社

参加した方（5人：しもばやし下林 たけし毅 おちあいよし落合義則 ふるや古谷 けい圭 あんどうけんいち安藤謙一 もりもとまこと森本誠
の皆さん）

私達の支援活動期間は3月19日から3月24日かけて宮城県の仙台空港横にて排水ポンプ車による冠水地域の排水作業を行いました。

出発する前日の17日は舗装工事の竣工検査でした。検査では大きな指摘もなく無事に終わり「今日は久しぶりに早く帰ろう」と話している中会社から電話が有りました。内容は思いもしない事でした「仙台に行ってもらえるかもしれないからまだ帰るなよ。また連絡する。」でした。その後家族に電話して「ひょっとしたら仙台に行くかも？」と話したら「なぜあなたなの？断れないの？」と聞かれた。その返答に困っていたら「もう決めたことでしょ」と言われた。何か淋しい気がしたが日頃から台風や大雨等に伴う警報が出れば「現場待機」といった具合に家庭を二番目の様な扱いをしているのではないのかなとも思いました。何とも因果な商売です。

その会話の少し後、再度会社から連絡があり「仙台に行ってくれるか？」と聞かれ「はい」と答えたら「明日の朝毛布と着替えを持って出社するように」と告げられた。それから帰宅し慌しく荷造りをし、翌18日朝出社しました。朝の時点で分かっている事は、中央道の内津SAに夕方5時に集合との事ぐらいでしたので午前中は器材等の準備をし、午後会社を出発しました。内津SAでは詳細が分かるのかなと思いましたが、派遣会社4社が集合し第一目的地の仙台西国道維持出張所へ翌日の朝9時までに到着という事が告げられただけでどこの会社がどこで何をいつまで復旧支援を行うのか、さっぱり判らないなか出発する事になりました。道中現地ではガソリンが不足しているとの報道もあったことから、SAで休憩の度、こまめに給油を行いました。順調に車を走らせましたが、宮城県に近づくにつれ通行止めやカーナビゲーションが古かった為、道に迷い仙台に到着したのは午前4時でした。実に会社を出発して12時間30分の道程でした。それから車内で仮眠をとった後、午前7時から国交省と各社のリーダーとの打合せがあり私達は仙台空港北で排水活動を行う事が決まりました。仙台及び活動場所への移動する際ですが、仙台市内は確かに震災の影響はあるものの報道されていた様な甚大な被害

が無かったので少し安心しました。

しかし活動場所へと車を走らせて行くうちに辺りの様子が少しずつ変化し突如仙台東部道路に差し掛かった所で風景が一変しました。その光景を見た全員が言葉を失い、胸が痛くなりました。これが先程まで目にしてきた同じ名取市かと目を疑う程でした。仙台東部道路が堤防の役割になり山側は先程まで見てきた通り震災の影響は少ないのですが、海側の家屋が在った場所は家の基礎のみ、道路には船、田畑には家の残骸といった具合にこの道路で明暗を分け海側では想像を絶する事が起きたのだと感じつつ活動場所へと進みました。

活動場所では既に先発隊が排水ポンプ車にて排水作業を行っており、私達はその作業を引継ぐ形でした。引継いだ作業は吸水口に詰まるゴミの除去、ポンプ据付け箇所の移動、ポンプ車の燃料管理、排水ホース管理等でポンプの能力が損なわないよう各個人が工夫をしながら作業に従事しました。作業中は何回か大きな余震があり作業を中断し付近で唯一流失を免れたポンプ棟へ逃げた時はさすがに生死を意識しました。また、時折自衛隊や住民の方が行方不明者の捜索を行いながら通って行かれる時は胸が痛くなりました。

今回のこの派遣を通じて感じた事は、一人一人の力は微力でも人が協力し合えば大きな力になるという事です。それにはまず各個人が自分の命を守り人の為に行動できるよう日頃から心掛けなければと思います。この災害を何時までも忘れず、末永い支援を望みます。また、このような惨劇がこの東海地方に起こらない事を切に願うばかりです。

○株式会社 渡邊組

参加した方（4人： あなんゆうじ 阿南裕二 かしま 加島 みつる 満 みうらかずお 三浦和男 みずき 水木 たける 武の皆さん）

我々が第二陣として今回の災害復旧支援へ向かったのは、震災からちょうど1週間後の3月18日でした。依頼がくることは予想していたものの、出発までの時間があまりにも短かったため、職員総動員での買い出し、緊急車両登録、スタッドレスタイヤの装着などの急務に追われたことが思い出されます。

18日の夕刻に会社を出発し、中央自動車道内津峠SAにて簡単な説明（集合場所と時間、集合場所までのルート等）を受け、再出発し、現地集合場所（東北地方整備局仙台西国道維持出張所）へ到着したのは翌朝3時頃でした。出張所で先乗りしていた中部地方整備局の担当者と打合せを行い、初めて自分たちがどこでどういった活動を行うかを具体的に知った状態でした。

我々が向かった先は宮城県東松島市赤井地区で海岸から4kmほどの場所でした。現地では第一陣の方々との引継ぎ後、直ちに24時間体制の排水作業が始まりました。作業箇所は赤井市民センターというコミュニティー広場の脇で、周辺を田んぼに囲まれた所でしたが、津波による影響が大きく、あたり周辺が海水に侵されていた状態でした。

その海水を8寸のポンプ4台（加藤建設さんと合わせると計8台）で隣接する定川へ排水することが我々の役割でした。作業引継ぎから4日後の朝（3月22日）には水位も無事下り、次の場所へと移動しました。向かった先は最初の場所から400mほど

東にある五味倉第二排水機場で、こちらも周囲を田んぼに囲まれた所でしたが、やはりその全てを海水に侵された状態でした。こちらでも24時間体制での排水作業が続き、24日の午前11時頃に第三陣の方々との引継ぎが完了するまで排水作業を続け、帰路に就きました。

1週間という短い期間でしたが、今回の活動に参加できたことを誇りに思います。

ただ、今も思い起こされるのは、休憩時間中に海岸近くまで歩いてみた時のことです。震災の凄まじい爪痕を目の当たりにしたことを一生忘れることはないと思います。最後に、東日本大震災で亡くなられた方々に対して心より追悼の意を表します。また、被災された方々に、心よりお見舞い申し上げますとともに、一日も早い復興をお祈り申し上げます。

(各社の活動)

